# 国際シンポジウム　ディスカッション

パネリスト　谷口雅博
サイモン・ケイナー
笹生　衛
佐藤長門
コメンテーター　李　永植
ディスカッサント　長友安隆
ディスカッション司会　山﨑雅稔

【山﨑】　ご紹介にあずかりました、山﨑と申します。どうぞよろしくお願いいたします。時間もありませんけれども、最初に青島神社の長友宮司にコメントをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

【長友】　ありがとうございます。私、本日のフロア、聴衆の代表ということで命を受けておりますので、よろしくお願いします。本日はこのシンポジウムにつながる淵源と申しましょうか、命脈と申しましょうか、そういったお話をさせていただければなと思います。

恐らく皆さんはご承知のことと存じますが、この西都原古墳群は、わが国最初の近代発掘調査の場所でございます。大正元年（一九一二）に当時の宮崎県の有吉忠一知事から京都・東京両帝大にお願いをして、わが国初の本格的古墳調査がこの地で行われて、今日に依然風聴されておるということでございます。

そして、その際に、東京帝大から参加したのが黒板勝美という当時の国史を代表する文献史学の先生ということですね。さらに、文化人類学の基礎を築いたといわれる鳥居龍蔵先生は、後に國學院大學に移られて。さらには柴田常恵先生という方も、後に鳥居先生と同時に大場磐雄先生が師事をされて、今日の祭祀考古学、笹生先生もご師事でございますけど、そこにつながる命脈をしっかりと國學院に伝えておるということですね。さらにもう一人、原田淑人先生は、京都帝大の濱田先生とともに東亜の考古というものの立ち上げを成したという方です。およそ百年前の、当代きっての先生がたの英知がこの西都原古墳群に集結をされ、そして、古代のこの県の中心地であり国分寺と国府があったというこの地、われわれが誇りを持っておった西都というものに本当に光を当てていただきました。宮崎県は今でも「神話の国」というふうに頑張っておりますが、その後押しをいただいたのも、その頃に端を発するのであろうと思います。

それ以前にも国学者が、先ほど本部雅裕宮崎県神社庁長からもございましたように、児玉実満さんですとか、また延岡のほうでは樋口種実さん、という方がいわゆる山陵研究をしながらということで発題をしておりますが、当時は鹿児島の江戸中期からの国学者といいますか、白尾国柱ですとか、後醍院真柱が神代三代の山陵はここだ、ということで『神代三陵志』や『神代山陵考』などを記しております。本当に古くから、我々は神話に対する関心が高い民族性であり、それを百年前の西都原古墳発掘調査が結実をさせ、今日への学統の命脈を保っておると。さらに、それを

平成も結びの本日、文化の日に、この地でシンポジウムが開催されたということで、非常に縁があるものなのかなというふうに感じたところでございます。

また、もうひとつは、先ほど李先生から興味深いご指摘がありましたけども、確かに、この宮崎の地も海外との交流の地であるということでございます。我々が一番親しく感じるのは、これから山を一つ越えた先の南郷村ですね。今では美郷町でありますが、百済王族の末裔との交流ということでございますね。神門神社の御神宝のほうが、本日、この地下で展示をされておるようでございます。

禎嘉王が神門神社、そして、ご子息の福智王が木城町の比木神社ですね。そして、また、その次男坊が伊佐賀の伊佐賀神社等々に祭られながら、これから、ちょうど旧暦の師走祭りとして、親子が再会をするという神事が行われます。過去の交流史に基づく伝説が今日まで伝えられておるということは非常に興味深いことであります。さらに、その神門神社の御神宝には、唐花六花鏡という正倉院とも同じ宝物もあるということで、やはり一つ何かしらの古代における重要な交流の地だったというのも言えるだろうなというのは、先ほど李先生のお話を聞いて思ったところでもございます。

我々が文化遺産等々で推すなかにあっても、やはり必ず学問的な後ろ支え、後押しが必要だということであります。文化遺産にするに際しても古墳の発掘調査もあり、さらに先般の報道では、神武天皇の聖蹟を関係する市町村と手を取りあいながら日本文化遺産へという動きもあります。やはりそれも昭和の十五年の頃には国を挙げての事業として文部省に設置された神武天皇聖蹟調査会に権威が集まり、学問的裏付けの中において各史跡を設定しておったと。

ただし、その際に、薩摩と宮崎の神を争う言論等々もあり、決定は大分からになったというのも歴史の事実として

あるんだろうと。考古から神話の間というものも、我々には非常に興味深いことです。これまでも先生がたによって研究されてはおりますが、やはり我々の国は、古墳が陵墓であり、さらには陵墓参考地であり、伝説地であるということから、なかなか発掘調査はできないという現状がございます。それは、ひとえに裏を返せば、今なお生き続けている国家であるから、というふうに思います。滅びた王朝ではなく、生き続ける文化であるからこそ、その国の中において周辺の学問から史実のほうを埋めていってるという各先生がたの非常に弛みない努力のおかげで今日があるんだろうな、と。フロアを代表して感じたことを述べさせていただきます。これから先生がたのお話を聞きたいなというふうに思います。よろしくお願いします。

**【山﨑】** ありがとうございました。長友宮司には、このシンポジウムの意義を國學院大學と『古事記』の研究、それから宮崎県、西都とのつながり含めてお話をいただきました。それでは、これからディスカッションに入っていきたいと思うんですけれども、時間が非常に限られていて五時十分までに終わるように厳命されておりますので、早速、議論に入りたいと思います。

まず佐藤長門先生が分かりやすく、なぜ歴史書が作られたのかが一番の問題なんだとお話しされたかと思います。佐藤先生のお話ですと、女帝が二人いて、その孫に皇位継承されなければいけなかったということだったと思うんですけれども、そうすると、アマテラスがそこに必要だったということですけど、女帝が皇位継承しなかったとすれば、アマテラスも必要なかったということですか。当時の女帝が出現してるっていう背景、少しお話しいただければと思います。

【佐藤】　祖先神は多分その前からあったんだと思いますけども、それを女性にする必要があったのかってことですよね。なぜ女神なのかっていう。それを現実の政治が神話に反映しちゃうのかっていう説と、関係ないよっていう説が、いまだに対立しているというか、二つあります。八世紀、七世紀の末から八世紀初頭にかけての王位継承の動向から、その国家、古代国家っていうのは、いつからできるのかっていう問題もあるんですけども、洋の東西を問わず国の成り立ちは古く見せたいということですね。

それは各国共通してるわけで、日本も戦前・戦中は、それこそ皇紀二六〇〇年っていうことで皆さんご存じだと思うんですけども、「西暦よりも古い歴史を持っていたのが我が国である」という教育をしてたわけです。しかし戦後、それはちょっとどうかな、という動きが出てきて、もうちょっと厳密に考えましょうということで古代史の学会では、全てではないですけども、多くの学者が考えてるのは、やはり大宝律令を導入した律令制国家、それ以降を古代国家の成立だとする説が多いのですけども、その神話というのを文字に起こすという、今まで伝承で口伝えで語られてきたものを文字に残すんだと、その理由って何？　目的って何？　ということで、今日は、現実の政治的な動きと絡ませて神話の形成ということを考えれば、こういう考え方ができるのかなという話をしたわけですね。女帝の話はまた別に。

【山﨑】　ありがとうございました。いろんな学説があって、これを『古事記』の成立、どう考えるか、非常に文献史学だとか、それから考古学から両側面から緻密に研究していくことが必要になってきている。その一端を、今日、佐藤先生のお話で聞くことができたかと思います。

佐藤先生から谷口先生に、『日本書紀』と『古事記』って歴史書、二つ、日本は作ってるわけですけど、これはどうしてでしょうかという質問がありました。先生、いかがでしょうか。

【谷口】　正直言って私も分かりません。人から聞かれたときには、よく分かってないんですよっていう感じでごまかしてるんですけど。考えられることとしましては、今日の佐藤先生の前半のほうのお話で、なぜその歴史書を作ったのか、作らなければならなかったのかっていうところで、やはり対中国ということで、これを強く意識していたということのお話があったかと思います。

『日本書紀』のほうは、中国を意識して、きちんと歴史書を作らなければならないという考えで作られたもの。より、その意識が強いのは『日本書紀』のほうだろうと。逆に『古事記』のほうは、佐藤先生の後半部のお話ですね。持統天皇からの皇位継承、あるいは元明天皇からの皇位継承、その正当化を目的としたという意識が、より強いほうが『古事記』なのかなという感じが、今日のお話伺いながら、そんなふうに思いました。

それから系譜へのこだわりという面では、『日本書紀』よりも『古事記』のほうが系譜へのこだわりが強い感じがします。これは神と天皇と、それから各氏族との関係というものを、よりこだわって書いてるのは『古事記』のほうのように思います。

それから羅列みたいになりますけども、『古事記』の場合には、必要なことを語りたい、描きたいことを一通り描いていると。描き終わったところで、もう既にこれで十分だということで、物語は顕宗記で終わって、仁賢以降は系譜しか載せないんです。やはり系譜へのこだわりは強いんですけど、もう既に物語を載せないっていうのは、もう言いたい

ことは全て顕宗記までで言ってしまったっていう、その意識があるのか。だとすると、歴史書としては少し意識が違う書物であった可能性があるかなというふうに、これは感想といいますか、論証も何もないものなんですけども。

あと最後に、今日お話ししたとこと絡めますと、もしかしたら叙事詩のようなものを作りたかったのかなっていう。日本には英雄叙事詩がないわけですけども、英雄叙事詩のようなものを、もしかしたら目指していたのかなっていう感じもなくはないということです。全部臆測です。申し訳ないです。

【山﨑】　ありがとうございました。対外的なものと対国内的なもの、系譜意識が強いところが一つのポイントなんだとおっしゃっていたかと思いますけれども、もう一つ、佐藤先生からは、韓国は歴史の編纂が遅れるんだっていうお話があったと思うんですね。今日、韓国から李永植先生がいらっしゃっていますので、韓国の古代の歴史書の編纂について伺いたいと思います。

【李】　佐藤先生は高麗時代の歴史の編纂のことをおっしゃいましたけれども、編纂の結果として、今、残っているものは新しい。それは確かです。ただ、『三国史記』や、その『三国遺事』の記録などによりますと、いわゆる三国時代、高句麗、百済、新羅での、自分なりの歴史書の編纂、国史の編纂というのは確かな形で痕跡を残しております。

高句麗の場合は、既に二世紀頃になりますと、『留記』という、百巻にものぼる国史を編纂した。そういう記録があります。もう少し後になりますと、それは百巻にもなりますから煩わしくて、『新集』五巻に縮める。そういう記事が残っておりまして、高句麗で自分の歴史の編纂があったことは確かです。

百済の場合は、近肖古王の時代に『書記』というのが出てきまして、多分、『日本書紀』の書名に大きな影響を与えたと思いますけれども、その『書記』の編纂が、近肖古王の時代ですから四世紀の半ばから終わり頃にかけて。そういう年代で国史の編纂が行われたということ。

また新羅にとっても智証王といいまして、五世紀初め頃なんですけれども、そのまま国史と書かれてあるんですね。この国史が編纂されたということが、今、『三国史記』の中にはちゃんと書かれてあります。ですから、高句麗と百済と新羅の場合、先ほど話がありましたけれども、高句麗は既に二世紀頃ですから、やはり中国の文化圏に近い所、それから遠い順に国史の編纂が行われたのかな。そういうことが分かります。

私が専門にしている伽耶には、不幸にも、そういう記録はございません。ですから、伽耶は小国であり、一つの古代国家にはなれなかった。そういう評価を得るわけで、国史編纂というのは、古代国家完成の記念碑的な、そういうものです。高句麗、百済、新羅には、ちゃんとそういう痕跡は確かめることができると思います。

**【山﨑】** ありがとうございます。高句麗の広開土王碑などには朱蒙から始まって広開土王に至るか、はっきりとした系譜は書かれてませんけれども、そうした系譜意識があると思うんですけれども、いかがでしょうか。

**【李】** そうですね。集安市にある広開土王碑文というのは、大体三通りの構成になっておりまして、最初は序文であって、真ん中は、その本文の広開土王の功績になるものであって、最後のほうは、墓をこういうふうに守ってくださいという守墓人という規定が書かれたわけですね。

序文の所は、最初、今、先生おっしゃってるように、建国のときから十六代目の広開土王まで、そういう流れが書かれてありますし、また三番目の守墓人の所でも、広開土王は、自分のときまで十五代の先王がいたんですけれども、その先王の墓と、その先王の印、その主が誰なのか、そういうことがこんがらがっているので、自分が全部碑を建てて、そういうものをはっきりさせた。守墓人の所には、そういうことが書かれてあるんです。ですから、やはり今、広開土王の時代は、はっきりした系譜意識はあったと思いますね。

【山﨑】　大体四世紀の終わりから五世紀というところですね。

【李】　広開土王碑文が建てられるのは、広開土王の息子の長寿王のときですから、正確に言いますと、四一四年のことです。

【山﨑】　ありがとうございます。李先生が先ほどお話しなられたように、高句麗とか百済とか新羅で国史の編纂があっただろうと。残念ながら、その大本は残ってないわけですけれども、一部は『日本書紀』に伝わるものがあったりします。それを含めて、そういう歴史書が朝鮮半島で作られていて、それと日本の『古事記』とか『日本書紀』といった歴史書の編纂がどういうふうに影響を受けたのかということは、本当は考えてみなければいけないと思います。ありがとうございます。

それからサイモン先生と李先生はお話の中で、韓国とイギリスの考古学的な事例をご紹介くださいました。非常に

貴重なお話だったと思うんですけれども、ここで考古学を専門とされている笹生先生、お二人のお話を伺って何かコメントがありましたらお願いします。

**【笹生】** 今日聞いて非常に興味深いなと思ったのは、一つは五世紀、今も長寿王のお話で四一〇年代って話と、サイモン先生の話で、イギリスのブリテンにおける大きな画期、四一〇年のホノリウス帝のローマ帝国がいったんイギリスを放棄するっていう画期が同じ頃なんですね。ですから五世紀という時期が、くしくも東アジアともヨーロッパとも関わってくる、大きな転換期になってくる可能性が高い。

私は別に意識して、今日それを言ったわけじゃないですけども、私の調査している中でも五世紀、その後につながってくる枠組みができてくるという問題とも関わってくるし、もっと言うと、多分、東アジアの古代帝国の規範である漢帝国の影響が基本的に大きくダウンしている。

晋ですね。四世紀に晋がおかしくなって、その後、五胡十六国になって、五世紀には南北朝に分裂をする。こういうような形で東アジアの求心性が急速に低下する中で、外縁部の三国ですね、高句麗、百済、新羅、それと伽耶。それと、あと日本列島における倭国。これが、それぞれ後の時代の枠組みをどんどん具体的につくっている。地域性をつくっている。

その中から国が、その後二百年ぐらいの中で日本はできてくるということになるわけですけど、ほぼ同じようなことがイギリスでも行われていて、七一〇年にローマの植民都市が放棄された段階で今度はアングロ・サクソンが入ってきて、その後、七王国の時代ですかね、ヘプターキーといわれる新しい時代ができて、それが今度は、その後、

十一世紀にノルマン・コンクエストですね、ノルマン人の征服があるわけですけど、その二つの画期を経て、今のイギリスの国ができてくる。

こういうような動きをしてるわけで、そういう意味じゃ東西の文化的な中心が求心性を失う段階で、外縁部で、そういう国家形成の芽が吹いてくる。これは同じなのかな。それがイギリスでも日本でも同じで、日本でワカタケルノオオキミ、雄略さんが活躍してる頃に、ちょっと遅れるかもしれませんが、伝説としてアーサー王伝説、ブルトン人の中の指導者のアーサー王伝説が伝わってくる。アーサー王と雄略さんは、つなげて考える人っていうのは、あんまりいないと思うんですけども、今日の話を聞いていると、そういうようなもう少し地球規模での大きな話ができる。

その中で、伝承がテキスト化される。これは、また中国との関係、もしくはイギリスの場合は、神聖ローマ帝国ですよね。シャルルマーニュが八〇〇年に即位するわけですけども、それとの関係の中でテキスト化というような動きがヨーロッパでもできてくる。こういうような形で、東西で少し並列して考えてみる。そうすると、『古事記』『日本書紀』のテキスト化という問題も世界史レベルで語れるかもしれない。というような可能性を今日は考えました。

それと、あと馬の問題。李先生が言われた馬の問題というのが非常に大きくて、先ほどサイモン先生ともお話ししてたんですけど、そのタイミングでヨーロッパでも馬の文化が広がっているっていう話があって、これも偶然なのかもしれませんが、その軍事的な問題の中で馬の重要性っていうのが、それぞれの地域で有用になってくる。その中で馬の文化っていうのが非常に重要視されてくる。こういう同じような、多分、脈絡で考えることができるかもしれないというようなとこを少し、今日は考えました。あんまり長くしゃべると、早くやめろと山﨑先生が言ってるように思いますから、このあたりで終わりにしたいと思いますけども、そんなところを感想として受けました。

【山﨑】　ありがとうございました。私どもも、まさかイギリスの地図を開きながら『古事記』を考えることを想像しなかったと思うんですけれども、ユーラシアの東西といいますか、シルクロードの端っこと端っこといいますか、そういうところで同じような現象を見ることができる。一つパターンを見ることができるといいますか、そうした中で『古事記』をもう一回新しい形で研究できるんではないか。そういうことになるかと思います。

サイモン先生、今、笹生先生がお話しになられたように、ローマとか中国があって、その衰退があって、自立化していく民族があって、歴史書が作られたんじゃないかってことがありましたけども、もう少しイギリスの国際的な状況といいますか、ヨーロッパ、大陸との関係の中で何かお話がありましたら、お願いしたいと思います。

【ケイナー】　ローマ皇帝と中国の皇帝の間に、いろんなつながりはあります。いろんな文化もずっと中国からヨーロッパに入って、私の先ほど絹のことですか、よかったんですけれども、そして最近の調査から、今、世界の状況が変わりまして、いろんな政治的な、難しいことはあったんですけれども、今よくイギリスの場合には、中国の歴史家とか考古学者がイギリスに来ると、実は去年からですか、ダラム大学の考古学者がイギリスから北京で発掘調査をやってくれとか、これから、そういう新しい態度がありましたら、いろんな新しい考え方が出てくるんじゃないかと思います。

【山﨑】　一つ交易だとか、そういうネットワークが形成されていって、ユーラシアの東と西もつなぐような中で、新しい歴史を考えられるということでしょうか。ありがとうございます。

それでは、もう一つ、先ほど系譜意識の問題があったかと思うんですけども、今日は笹生先生が鏡と、それから刀

剣の中で通して、系譜意識が強くなっていく、日本化していくようなものがあるっていうことでしたけども、『古事記』につながるようなきっかけっていうのは、どのあたりにあったと考えたらよろしいでしょうか。

【笹生】　やはり五世紀が大きいのかなというふうに思ってます。最近は、古墳から出てくる遺体の血縁関係の分析というのも随分進んでおりまして、それが四世紀までは、どっちかっていうと、女性の首長もいるし、きょうだいで入ってる。それが五世紀になると男性にかなり偏り始めてくるという研究が結構、最近、明確になってきている。そうなってくると、男性系譜ですよね。だから、それが血縁かどうかは別としても、男性から男性へと権限なり資産、不動産、動産を継承していくというような構造が五世紀には明確。中期古墳ですね、だから四世紀の末ぐらいから五世紀にかけて明確化してくる。

その中で、どうも、今日も少し触れましたけども、千葉のああいう集落、実は同じような状況が香取神宮の周辺の集落でも古墳と集落、同じ状況が、あれも平安の後半までつながっていっちゃうんですけども、五世紀の中頃から平安にかけて連続するような在り方、景観がまさに、さっきのサイモン先生も言ってましたけど、景観的に分析をしていくと連続性が出てくる。それが五世紀のどこかということになってきますので、系譜意識、特に男性系譜というところで系譜を意識しだしてくるっていうのは五世紀の前半っていうのが大きいのかな。

それは多分さっきの馬の問題とも関わってきて、馬を使った軍事行動、それを統率する指揮命令系統、そういう問題と場合によると関わってくる。実際に倭国から朝鮮半島へと軍事行動を、五世紀の初頭とか、している痕跡がありますよね。そうなってくると、そこら辺の問題とも実は、もう既に指摘されてるところですけども、そういう問題も

あり得るかなというふうには思います。

【山﨑】　ありがとうございます。国際的な、あるいは国内的な変化の中で系譜意識が出てきて、それが『古事記』につながっていくようなところが見えるかもしれないというところでしょうか。

時間が参りました。まだ、いろいろとお伺いしたいことはありましたけれども、『古事記』と国家形成ということで、いろんな学問的な方法を通して、あるいは中国、韓国、そしてイギリスですね、世界的な状況の中で『古事記』を考えてみようというのが見えてきたのではないかと思います。これで、このディスカッションを終わりにしたいと……。

【佐藤】　やめちゃうの？　駄目ですか。文献史学の方から言うとですね、五世紀、笹生さんは、そうおっしゃいましたけども、六世紀っていう説がむしろ強くて、それは五世紀段階の大王を出す集団は、実は複数あったっていう考えが、今、有力で、それが、欽明以降が今の今上天皇までずっと続くんですね。そういう王権の構造を考えると、むしろ六世紀が画期かなっていう。五世紀っていうのは古墳時代の頂点ですから、そういう流れがあって、それを、いったんチャラにして六世紀からっていう、そういう考えもありますということです。

【山﨑】　ありがとうございました。この続きを聞きたい方は、ぜひ渋谷に遊びにいらしてください。それでは終わりにしたいと思います。ありがとうございました。